



Title	太閤記物の研究 : 権力と文学の関わりに注目して [全文の要約]
Author(s)	竹内, 洪介
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15053号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/85407
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Kosuke_Takeuchi_summary.pdf



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 竹 内 洪 介

学位論文題名

太閤記物の研究——権力と文学の関わりに注目して——

本論文は、近世期全般に亘って散文・韻文・演劇・絵画等のあらゆるジャンルに展開した豊臣秀吉の伝記的作品群の総称である太閤記物について、豊臣氏および徳川氏の「権力」との関わりに注目しながら考察したものである。この目的に即し、本論文では桃山期の作品『天正記』と、近世後期以降の作品群『真書太閤記』『太閤真蹟記』『絵本太閤記』『重修真書太閤記』『絵本豊臣勲功記』をそれぞれ題材として取り上げる。文学と権力の関係を考察するという目的は同じながら、それぞれに対象となる時代と政権が異なるため、その構成は以下の通り二部に分かたつ。

第一部は、『天正記』、特に前述の理由から同書の一編であり、天正 16 年（1588）に秀吉が主宰して行われた、後陽成天皇による聚楽第行幸の記録でもある『聚楽行幸記』に注目して二章構成で考察する（別に付録を付す）。『天正記』に秀吉の政治的思惑が反映されていることは既に先学が指摘しているが、本論文では『聚楽行幸記』の良質な写本が現在も数多く残っている点に注目し、書誌学的観点から秀吉の政治的思惑がいかん『天正記』（およびその関係文献）に反映されているかという視点を出発点として検討していく。

その眼目ともいえる第一章「『聚楽行幸記』諸本考」では、『天正記』の一編『西国征伐記』に関する『言経卿記』の記録を手掛かりに諸本を分類する。また、料紙や装訂といった書誌が『聚楽行幸記』の原本二種において使い分けられ、そこには書誌の使い分けに対応するような本文の異同も確認できることを指摘する。第二章「天正二〇年聚楽行幸考」では、従来未確認であった天正 20 年（1592）の第二回聚楽行幸（この時の主宰は秀吉ではなく豊臣秀次）の記録『天正二十年 聚楽第行幸記』（柳沢昌紀氏蔵）を確認し、同書の読解を通して第二回聚楽行幸が豊臣政権にとっていかなる意味を持っていたのかを考察する。この考察を通じて、同書が武家関白としての秀次の性格を喧伝するために著されたこと、そしてこの時の行幸が関白に軍事的要素を付与することで秀吉から秀次への関白相伝を正当化し、それを演出する場であったことを明らかにする。第一部には付録として『天正二十年 聚楽第行幸記』解題・翻

刻」も付すが、これは第二章で中心的に取り上げる『天正二十年 聚楽第行幸記』を全文翻刻したものである。以上、第一部を以て、豊臣政権が関与した文芸について検討する。

第二部は、対象となる時代を近世後期に移し、近世後期～末期における代表的な太閤記物である『真書太閤記』『太閤真蹟記』『絵本太閤記』『重修真書太閤記』『絵本豊臣勲功記』を題材に、四章構成で考察する（別に参照した諸本を一覧にまとめた付録を付す）。このうち『絵本太閤記』以外の諸書は桑田忠親氏・中村幸彦氏による基礎的研究から殆ど進展していない。この点に注目して検討を進め、『真書太閤記』『太閤真蹟記』『重修真書太閤記』の三書については成立や諸本の位置づけについて従来の説を大きく訂正する。そのため、第二部の前半では諸本論を中心に扱い、後半で『絵本太閤記』の絵画的展開と、そうした同書の人気に支えられた太閤記物に対する幕府内の検閲態度の変化を考察する。

このうち、第一章『太閤真蹟記』異本系統考』は、『太閤真蹟記』の諸本について考察したものである。当該章では『太閤真蹟記』第五編に見られる諸本間の異同に注目し、それに前後関係が認められること、具体的には改訂後の本文が「秀吉の功を強調した筋」に改められていることを指摘する。第二章「太閤記物実録三種考」は、『真書太閤記』『太閤真蹟記』『重修真書太閤記』の三書を取り上げる。従来、『真書太閤記』は『重修真書太閤記』の別称であるとも『太閤真蹟記』の別称であるともされており、これら三書の区別が不鮮明であった。当該章ではまず『真書太閤記』が『重修真書太閤記』に先行する別の書物であること、そして『真書太閤記』の成立が『太閤真蹟記』に先行することを示す。さらに、第一章の検討結果とも合わせつつ、『真書太閤記』『太閤真蹟記』諸本群を前後関係の明らかな二系統に分類し、その二系統がそれぞれ『真書太閤記』と『太閤真蹟記』の原態にあたる可能性を指摘する。

一方、第三章「屏風になった『絵本太閤記』」および第四章「幕末の出版検閲と『絵本太閤記』の再版」では、第一章・第二章とは視点を変えて『絵本太閤記』を中心材料として扱う。第三章では近時確認した「絵本太閤記屏風」（架蔵）の紹介を行う。この屏風は『絵本太閤記』の挿絵 16 点を極彩色で引き写して屏風装に仕立てたもので、『絵本太閤記』だけでなく絵本読本を題材としたものとして稀有な例である。当該章ではこの屏風の製作意図を考察し、これが秀吉の「智」をテーマとしたものであり、また近世後期に流行したとみられる智将としての秀吉像を具現化した絵画資料として認めうることを指摘する。

また、第四章では『絵本太閤記』の再版に注目し、幕末の出版統制の変容について考察する。具体的には、文化元年（1804）に絶版となり、安政六年（1859）に再版許可が下った『絵本太閤記』の再版本に見られる人名が、それまで禁じられていた実名を用いており、しかもこの実名表記が幕府側の命令によってなされたことに着目する。その上で幕末期の日本にあって秀吉の評価が高まっていたこと、その評価が検閲

態度にも影響を及ぼした可能性があることを指摘し、徳川家による書物の出版統制が変容した結果、『絵本太閤記』の再版が許可されたということを明らかにする。これら全四章で構成する第二部を以て、徳川政権が出版統制令以後にどのような形で太閤記物文芸作品に関与したかを検討する。

以上、第一部の『聚楽行幸記』を中心とした太閤記物の検討、第二部の近世後期太閤記物散文作品群の検討を以て、太閤記物の展開が近世期の時代性・政治性を色濃く反映していたことを指摘する。豊臣期に顕彰のため利用された太閤記物は徳川期には弾圧の対象となり、時代が秀吉を英雄として認識し始めると幕府としてもそれを認め、弾圧を緩めることとなったのである。